

実践論に基づくワークショップデザイン方法論の開発と社会実装

北野 清晃

要約

本論文は、ワークショップの実践的研究をテーマとする。実際のワークショップを題材とし、活動の解析、相互行為の分析を行うことでワークショップでの実践を記述する。さらに、それらの研究知見に基づくデザイン方法論と実践コミュニティの社会実装への取り組みについて論じるものである。

第1章では、ワークショップの既存研究を概観し、本論文の立脚点となる実践論のアプローチの必要性を示し、研究目的と論文の構成について述べている。ワークショップの活用領域の拡大とともに、その考え方が領域ごとに細分化し、これに関する研究も領域に閉じた議論が展開されてきた。このため、領域を超えたワークショップの包括的な記述・分析が課題となっている。既存研究には、ワークショップのモデル化の試みは見られるが、主観主義と客観主義の2分法に陥ったものに留まっており、ワークショップで起きる状況依存的な事象を理解可能なものとして記述・分析することができていない。本論文では、主観主義と客観主義の2分法を乗り越える「実践論」を研究の立脚点とした。実践論とは、個別具体的な環境・文脈下での人々の活動や行為である「実践」そのものに焦点を当てる理論的視座で、これにより、実際のワークショップでの人々の活動や行為を、詳細に記述・分析することができる。本章では、実践論のうち、この論文で用いる状況的学習理論、活動理論、エスノメソドロジーの理論的背景を説明した上で、本論文の全体像を示した。

第2章では、ワークショップでの人々の実践として「活動」に注目し、そのモデル化を行った。既往研究では、ヴィゴツキーの活動理論を援用したF2L0モデルがあり、主にリフレクションの分析枠組みとして活用されている。しかし、このモデルはあくまで理念型であり、多様な活動形態が存在する実際のワークショップでは表現できないことが多い。本章では、F2L0モデルと組織構造論での組織形態を踏まえて、ワークショップの組織構造モデル（FP0モデル）を構築した。構成要素と展開条件を定義し、基本形を演繹的に展開することで、ワークショップの組織形態のパターンを網羅的に記述した。これにより、ワークショップで刻々と変化する活動形態が記述可能となる。なお、ワークショップデザインを学ぶ大学院授業において、FP0モデルを用いた試行実験を行い、適用性を考察した。

第3章では、ワークショップでの人々の実践として「行為」に注目した。エスノメソドロジーを用いて、ワークショップ参加者間の相互行為を分析した。前章のFP0モデルはワークショップの活動を時系列に記述できるが、その過程で、ファシリテーター、参加者など、相互の関係性をあらかじめ指定する。しかし、実際には、ファシリテーターがいかに関与しているか、参加者がどのような参加者であるかなど、関係性は、

状況依存的で相互行為を通して形成される。そこで、本章では、ワークショップ開始から自己紹介までの冒頭部分の会話のトランスクリプトと動画を用い、エスノメソドロジーによって相互行為を分析した。結果、参加者がどのように自己呈示を行い、組織アイデンティティが形成されるかの数例のパターンが示された。特に、自己呈示には、境界オブジェクトを用いたマテリアリティ（物質的行為）が重要であることが明らかとなった。

第4章では、ワークショップ実践者育成の方法論の体系化と、方法論の社会実装に必要な実践コミュニティの構築について述べている。最初にワークショップの認識を問うアンケート調査、実践者育成を行う企業へのインタビュー調査を行い、ワークショップの実践者育成の実態を明らかにした。そのうえで、第2章の活動の解析、第3章の相互行為の分析から得た知見に基づき、実践者育成の具体的な方法論を提案した。さらに、ワークショップの実践者育成を社会実現すべく、領域の枠を超えた実践コミュニティの創出活動について具体的な提言を行なった。

第5章では、本論文の結論として、各章の研究知見を整理し、論を閉じた。